

## 小さな親切、大きな親切

埼玉県 豊野小学校 6年 廣岡 迪智子

「夏休みも漢字練習がんばってるよ！」

私はその言葉を聞いてびっくりしました。

私はふだん放課後児童クラブに通っています。学童での6年生の友だちは少なく、下級生、主に低学年の子と仲良くすることが多いです。私は外で遊ぶのが少し苦手で、みんなが外で遊んでいる時間は、基本的にひとり部屋で宿題や自主勉強に取り組んでいます。

ある日、2年生の女の子がこんなことを言いました。

「この字、私の名前の『道』って字だよ！」

と、教科書の「道」という字を指さしていました。私は、6年生の教科書の難しい言葉や漢字の中から、共通点を見つけようとするそのまなざしに、少しほっこりしました。

私はその子にこんなことを言いました。

「漢字、教えてあげようか？」

すると、目を輝かせてうなずいてくれたのです。さっそくノートと筆箱と2年生の教科書を準備し、練習を開始しました。教科書の裏にのっている熟語を順番に言っていくのが私の役目です。私が2年生のときのテストに出てきた熟語など一通りやりました。そのときは勉強の時間ではなく室内遊びの時間でしたが、1時間机に向かい続けました。ふと周りを見ると、机がノートでいっぱいになっていました。

室内遊びの時間が終わると、

「楽しかった！明日も漢字やる～」

と言ってくれました。

それからは自主勉強として家で練習もするようになり、夏休み直前、私は「ひまわり賞」という学校でもらえる賞をいただくことができました。それは、低学年のめんどうをよく見ているという、他学年の先生からの推せんだったそうです。名誉ある賞だなと感心しながら、夏休みをむかえました。

ある日、友達と遊んでから帰る途中、いっしょに漢字をやってきた女の子が声をかけてくれました。

「夏休みも練習がんばってるよ！学校が始まったらまた教えてね！」

という、わたしにとってすごく嬉しいふたことでした。私はそのとき初めて、

(漢字を教えてきてよかったな、欠かさず練習を続けてよかったな)

(人に協力するのを惜しまなくてよかった。親切にしてよかったな) と思いました。

私自身、実際にこれが「親切」なんだと気づいたのは、その2年生の言葉からでした。

「親切」は、自分がいいことをして「あげた」という認識ではなく、日ごろから当たり前だと思っていること。「こうすれば相手がよく思ってくれるだろう」という、無意識中の認識から生まれる自然な行動こそが、本当の「親切」なのではないかと、今回の体験から感じました。

この経験を第一歩として、大人になっても、「相手がよく思う」を心に、親切が自然とできる人になりたいです。